1. 戦前の漁村生活



数金さんが生まれた頃の新官港の様子。
まだ港は埋め立てられていませんでした。
当時は現在より海水もきれいで、岸辺でも
魚が多く獲れたそうです。



昭和 15 年の豊浜小学校。数金さんはこの
前年、14 歳の時に尋常小学校高等科を中
退し、父と共に漁船に乗り組み始めていま
した。



上は「突んぼ漁（奥）」「見
突き漁（手前）」のジオラ
マ。右は「タコ瓶（がめ）」
と大きさ比較用の軍手。
ポピュラーであったこれら
の漁法も現在はほとんど
行われなくなりました。



大正１４年（１９２５）５月５日、数金康雄（すがね やすお）さんは、豊浜村新官（しんが）で、「金生丸（きんせいまる）」による漁業を営む数金貞吉・トリさん夫妻の長男として誕生しました。

昭和 14 年（１９３９）、１４歳の時、父と船に乗っていた叔父が急逝したため、尋常小学校高等科を中退して漁業の道に。当時の新官は磯や砂浜が広がる風光明媚な海岸で魚も多く、岸から数百メートルの沿岸操業で、カツオ、イカ、ビンチョウ、ワラサ、イワシなどが主な獲物でした。また、一斗缶の側面に丸く穴をあけ、ブリキの細切りで簀（ズ）のような仕掛けをした中にイワシを入れて何十匹も捕れるウツボや、不要な魚の内臓などを着物を血だらけにしながらブツ切りにしてタコ瓶に入れておけば、100/500 個ほどにタコが入っていたそうです。

他にも、一丁漕ぎの舟を操り箱眼鏡と 6 メートル位のモリで貝類を採る「見突き漁」も行いました。舳先のスリッパに足をかけ身を乗り出すように三又のモリでカジキを突く「突きんぼ漁」では、バランスを崩し４．５回は海に落ちましたが泳ぎが得意で平気だったとのこと。初夏、船上から３０kgくらいの若いカジキが 5.6 匹並んで北上していくのをよく見かけましたが、秋になると北の海でサンマなどを食べ 60～70 kgくらいに太って戻ってきます。今と違い漁場も近かったのでカジキは毎日何十匹も港に揚ったそうです。

当時、水揚げは波打ち際の船からのバケツリレーで、籠にイワシ一杯で８０円ほど。それらを樽に入れ大八車で勝浦まで売りに行き、「あまからや」でお汁粉を頂くのが何より楽しみだったそうです。勝浦港で直接水揚げすればと思われますが、港ごとに固有の暗礁と船道が有って座礁してしまう人もおり、慣れ親しんだ地元港以外への入港を敬遠する漁師が多かったそうです。いずれにしても、約３トン、木造焼玉エンジンの金生丸１隻で親戚も含め１３人を養うことが出来たほど、勝浦の海の魚影は濃かったのでした。